

# 日本國天皇家論

## 3章 日本國天皇家

### 日本書紀の日本國

# 日本國天皇家最後の天皇天智

天智紀は簡単ではない。天智紀の時代はどんな時代だったのか。そこから始めよう。

## 戦争の時代

日本書紀「天智天皇」の代は戦争の時代である。その源は「唐」である。唐の侵略を受けて東アジアの國が減んでいく。

- 581 開皇元年隋帝高祖即位。百濟、高句麗朝貢
- 589 開皇9年隋南朝陳を平定、中国を統一。百濟朝貢、高句麗は朝貢せず。
- 608 隋煬帝答礼使文林郎裴清、隋、琉球・高句麗を侵略。
- 618 隋煬帝のいとこ李淵クーデター・李淵、隋恭帝に禅譲させ帝位に即く。年号を武徳とする。
- 621 武徳4年、唐、洛陽に進入。王世充鄭國を滅ぼす
- 642 百濟義慈王、高句麗と共に新羅(女王善徳)を侵略。金春秋、唐に出兵要請
- 654 新羅武列王即位
- 660 唐蘇定方水陸13萬で百濟侵略。百濟平定・熊津を初め五都督府を置く。

## 百濟滅亡

660年百濟は唐・新羅の侵略を受け百濟王家は滅んだ。その後、百濟の遺臣は百濟國再興を願って日本國に人質として来ていた「豊章」を王に立てて百濟を復興する。王「豊章」は再び新羅と戦うのであるが、旧臣福良と対立して、この最も頼れる家来を殺してしまう。その機を逃さず、新羅は百濟の首都を囲み、そして白村江の戦いとなっていく。白村での敗戦後、百濟王家の人々は同盟国、日本國への亡命を決意する。その悲しい状況を天智紀は記している。

九月の七日に、百濟の州柔城、始めて唐に降ひぬ。是の時に、國人相謂(かた)りて曰く「州柔降ひぬ。事奈何(いかに)といふこと无(な)し。百濟の名、今日に絶えぬ。丘墓の所、豈能く往かむや。但豆禮城に往きて、日本の軍将等に會ひて、事機(ことはかり)の要とする所を相謀るべからくのみ。」といふ。遂に本より枕服岐城に在る妻子等に教へて、國を去る心を知らしむ。十一日に牟豆に發途つ。十三日に、豆禮に至る。二十四日に、日本の船師、及び佐平余自信・達率木素貴子・谷那晋首・憶禮福留、併て国民等、豆禮城に至る。明日、船發ちて始めて日本に向ふ。

ここに百濟は滅ぶ。亡命先は日本國と記されている。百濟王家一族は日本國への亡命を決意し始めて関西の地を踏むことになった。

## 日本國

日本國とはいかなる国家か。高句麗との国交記録が日本書紀にある。

又日本の、高麗を救う軍将等、百済の加巴利濱に泊りて、火を燃く。灰変りて孔に為りて、細き響きある。鳴鏑の如し。或(あるひと)の曰はく、「高麗・百済の終に亡びむ徴(しるし)か」といふ。

高麗救援のため、日本國は派兵していた。唐の太宗は二度高句麗に遠征、さらに、高宗は三度遠征をしている。唐の侵略と戦う高句麗の支援に日本國は派兵していた。日本國と高句麗の同盟関係が強いことが示されている。それを象徴しているのが「法興寺」である。「法興寺」は飛鳥安居院の敷地に存在した一塔三金堂様式の寺院であった。一塔三金堂の寺院様式は高句麗の寺院様式である。「法興寺」が高句麗様式の寺であったことは寺の建造に携わった関係者の中に高句麗出身者が中心的役割を占めていたからである。「法興寺」が建立されたのは日本書紀では588年である。日本國と高句麗には、その時、深い国交があった。上の記事は海外の史料から取り込んだものであるが、八世紀の日本書紀編者は日本國の国号をそのまま此処に使って表記している。日本國とは九州天皇家の国号ではない。当時の九州天皇家の國は「倭(やまと)」である。倭(やまと)とは国号といえるものではない。高句麗と国交を結んでいた日本國とは「法興寺」が存在した関西の国家である。

夏四月に、鼠、馬の尾に産む。釈道頭占ひて曰く、「北国の人、南国に附かむとす。蓋し高麗破れて、日本に属かむか」といふ。

「釈道」とは高麗僧の名前である。彼は「日本世紀」という歴史書を著した。その書名が示す如く、「日本世紀」とは日本國に関する歴史書である。日本國は高麗と国交を結び、朝鮮半島においてその存在を知られた大国であった。「北国」とは高句麗である。「南国」とは日本國である。日本國は高句麗と百済と同盟関係を結び、新羅は唐と同盟関係を結ぶという国際情勢にあった。

## 日本國から白村江への派兵

天智二年(663)三月、2萬7千の百済救援軍を派兵した。この大軍は日本國の軍である。百済救援軍は次の陣立てとなっていた。

天智二年三月前將軍上毛野君稚子(わかこ)・間人連大蓋(おほふた)、中將軍巨勢神前臣譯語(をさ)・三輪君根麻呂(ねまろ)、後將軍阿倍引田臣比羅夫(ひらぶ)・大宅臣鎌柄(かまつか)を遣して、二萬七千人を率て、新羅を打たしむ。

前將軍が「上毛野君稚子」である。舒明紀に「上毛野君形名」という名の將軍が蝦夷討伐の將軍として登場する。「形名」と「稚子」は同族であろう。舒明紀の「上毛野形名」は蝦夷討伐に失敗する。この蝦夷討伐物語は日本國の物語である。蝦夷とは東海地方を指す。その蝦夷國との戦いに敗れ、「形名」は砦に逃げ帰る。蝦夷の軍に囲まれ、夜の闇にまぎれて脱走しようとした時、妻が嘆いて叱咤する。

「慄(うれた)きかな、蝦夷の為に殺されむとすること。」といふ。則ち夫に謂(かた)りて曰はく、「汝が祖等(おやたち)、蒼海(あおうなはら)を渡り、萬里(とほきみち)を跨(あふどこ)びて、水表(をちかた)の政(まつりごと)を平(ことむ)けて、威武(かしこくたけ)を以て後葉(のちのよ)に伝えたり。今汝頓(ひたぶる)に先祖が名を屈(くじ)かば、必ず後世の為に嗤(わら)はれなむ」といふ。乃ち酒を酌みて、強いて夫に飲ませしむ。而して親(みづか)ら夫の劍を佩(は)き、十の弓を張りて、女人數十に令して弦を鳴さしむ。既にして夫更に起ちて、仗(つはもの)を取りて進む」

恐るべき妻のおかげで、「形名」は蝦夷に勝利する。この時、妻は夫に酒をすすめ、鼓舞する際に言った言葉が次の言葉である。

汝が祖等、蒼海を渡り、萬里を跨(あふどこ)びて、水表(をちかた)の政(まつりごと)を平(ことむ)けて、威武(かしこくたけ)を以て後葉(のちのよ)に伝えたり。

貴方の祖先ははるばる萬里の海を渡って来た。そして海外の國を平定し、その武勇を後世に伝えてきた。

これはまさしく「倭王武」の上表文である。「上毛野君」は「姫氏」の王の系譜であろう。「姫氏」は磐井が王であった時、日本國との決戦に敗れた。その後、日本國天皇家に投化した。その一族に「上毛野」がいたのであろう。元来、武勇を誇る一族である。百濟救援二万七千軍の最前線の將軍に任命された武將が「上毛野君稚子(わかこ)」であった。彼は善戦して、新羅の二つの城を取った。しかし、八月白村江の戦いが勝負を決める。

## 大日本の救將廬原君(いほはらのきみ)

天智二年(663)秋八月の十三日。新羅、百濟王の己が良將を斬れるを以て、直に國に入りて先ず州柔(つぬ)を取らむことを謀れり。是に、百濟、賊の計る所を知りて、諸將に謂りて曰はく、「今聞く、大日本の救將廬原君(いほはらのきみ)臣、健兒萬余を率て、正に海を越えて至らむ。願はくば、諸の將軍等は、預め圖(はか)るべし。我自ら往きて、白村に待ち饗へむ」といふ。十七日に、賊將、州柔に至りて、其の王城を繞(かく)む。大唐の將軍、戰船一百七十艘を率て、白村江に陣烈(つらな)れり。二十七日に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合い戦ふ。日本不利けて退く。大唐陣を堅めて守る。二十八日に、日本の諸將と百濟の王と、氣象を觀ずして、相謂りて曰く、「我等先を争はば、彼自づから退くべし」といふ。更に日本の伍(つら)乱れたる中軍の卒を率て、進みて大唐の陣を堅くせる軍を打つ。大唐、便ち左右より船を挟みて繞み戦う。須臾之際(ときのまに)に、官軍敗績(やぶ)れぬ。

百濟王は八月、「大日本の救將廬原君(いほはらのきみ)臣、健兒萬余を率て、正に海を越えて至らむ。」と諸將に伝える。そして自ら白村に迎えて労をねぎらうと言います。救援軍は「大日本」というように日本國からの軍隊であった。司令官は「大日本の救將、廬原君(いほはらのきみ)臣」である。日本國將軍・廬原君とは誰か不明であるが、万葉集に「廬原」という地名が歌われている。

田口益人大夫、上野國の司に任さす時に、駿河の淨見崎に至りて作る歌二首

万葉296番歌

廬原の 清見の崎の 三保の浦の 寛けき見つつ もの思ひもなし

万葉297番歌

晝見れど 飽かぬ田兒の浦 大君の 命恐み 夜見つるかも

「廬原」とは静岡県庵原郡であろう。「白村江」の戦いに救援に駆けつけた軍は静岡県の軍で、日本國の最も東の國から、長駆、百濟に向かったと思われる。ここが日本國統治の東の境界だったであろう。

8月27日、「白村江」に到着した日本軍はすでに堅陣を構えていた唐の郎將・劉仁軌、新羅の金文武王の軍へ正面攻撃を挑む。だが、「白村江」に不案内な日本國軍は氣象が読めず、満潮から干潮へ変わる潮時に突入し、舳先を回旋することが出来ず、左右から火攻めにあつて東の間に敗れる。

「白村江」で唐軍・新羅軍と戦い壊滅に近い敗北を喫したのは日本國の軍であった。中国側の唐の劉仁軌將軍の記録書には「倭の酋長」を唐の都に送ったと記録している。この「倭」とは九州天皇家ではなく日本國天皇家である。「白村江」で敗れた日本國天皇家は国土防衛のため城を築いている。

## 敗戦後の国土防衛

664 是歳、対馬・壱岐・筑紫國に坊(さきもり)と烽(すすみ)を置く。  
又筑紫に大堤を築きて、水を貯えしむ。名づけて水城といふ。

665 8月に達率答城春初遣して、城を長門國に築かしむ。  
達率憶禮福留・達率四比福夫を筑紫國に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

667 倭國の高安城・讃岐國の山田郡の屋島城・対馬國の金田城を築く。

671 2月、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門城一つ・筑紫城二つ築く。

(1) 白村敗戦後「大野城」「椽城」「高安城」「屋島城」「金田城」「長門城」「筑紫城」を築いている。白村で大敗したとはいえ、日本國天皇家が滅びたわけではない。日本國天皇が亡くなったわけではない。日本國は唐の侵攻に備えて、行路の要地の防衛を固めていた。

(2) 年輪年代測定法による「大野城門の柱」の測定結果がある。奈良国立文化財研究所の測定結果は「大野城の最外年輪は648年」である。「大野城」の築城は663白村江敗戦より15年前ということになる。この結果は大宰府を護った大野城は、665年が最初の築城ではなく、648年には既に築かれていたということを明らかにしている。白村の戦いに敗れた日本國天皇家は再び大宰府防衛のため大野城を改築修理したのである。

対馬－壱岐－筑紫(博多)－長門(山口)－屋島(香川)－高安(大阪)は唐船団が百済から日本國に向かう侵攻ルートであった。

## 唐との外交

白村江敗戦以降の日本國天皇家の対唐外交を見よう。

- 664年 5月17日 百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。  
10月1日 郭務悰等を發(た)て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。  
10月4日 郭務悰等に饗賜ふ。  
12月12日 郭務悰等罷り帰りぬ。
- 665年 9月23日 唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に対馬に至る。  
9月20日 筑紫に至る。  
9月22日 表函を進る。  
10月11日 大きに菟道に關す。  
11月13日 劉徳高等に饗賜ふ。  
12月14日 物を劉徳高等に賜ふ。  
12月 劉徳高等罷り帰りぬ。  
是歲、小錦守君大石等を大唐に遣す。

- (1) 朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高が筑紫(博多)に到着したのは665年9月20日である。そして二日後の22日に表函(親書)を献上している。表函は天皇に渡されたものである。
- (2) この時、天皇は筑紫(博多)の近くにいた。奈良藤原京ではない。
- (3) 天皇がいた御所とは太宰府である。
- (4) 664年朝散大夫郭務悰が持ってきた表函は実は唐皇帝の親書ではなかった。故に唐の使者を京に入れなかったと伝わる。その京とは太宰府である。
- (5) 天皇は唐との外交のため太宰府に来ていた。唐との外交の舞台は太宰府であった。

- 667年 3月19日 都を近江に遷す。  
11月9日 百済の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。  
13日 司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。
- 668年 7月 栗前王を以て、筑紫率(つくしのかみ)に拜(め)す。
- 669年 正月9日 蘇我赤兄臣を以て、筑紫率に拜す。  
是歲、小錦中河内直鯨等を遣して、大唐に使せしむ。  
又大唐、郭務悰等2千余人を遣せり。
- 671年 正月13日 百済の鎮將劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。  
6月 栗隈王を以て、筑紫率とす。  
7月11日 唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り帰りぬ。

11月10日 対馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫君薩野・韓嶋勝婆娑・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰はく、今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭(とよ)みて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍(やうやく)に来朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。

12月3日 天皇、近江宮に崩りましぬ。

- (1) 667年11月大山下境部連石積等が送られてきたのは筑紫都督府である。彼らは665年の唐への使者であった。その使者が筑紫都督府に戻ってきた。筑紫都督府とは太宰府のことである。
- (2) 彼らは何故奈良ではなく太宰府に送られてきたのか。その理由はそこに国王が居たからである。この時天皇は唐との外交のため琵琶湖近江ではなく太宰府にいたのである。太宰府が日本國の西の京であった。
- (3) 天智紀の歴史舞台は奈良藤原京、滋賀近江、博多、大宰府と広域である。博多には百済の鎮將劉仁願が派遣してきた何千人の兵が駐屯していた。大宰府の天皇はこれらの唐軍と対峙して外交をすすめていたのである。
- (4) 671年12月3日に天皇が亡くなった。亡くなった場所は近江宮である。この近江宮は滋賀県近江である。太宰府で唐との外交に辛苦した日本國天皇は琵琶湖の近江宮に帰り、そこで亡くなった。

## 天智紀は日本國天皇紀

白村での敗戦以来、日本國天皇は太宰府に入り、外交に当たった。天智紀はこの天皇の記事記録である。だが、天智紀は不可解である。白村敗戦後の664年以降で、「天皇」、「皇太子」、「大皇弟」が登場する記事を抜き出して検討してみよう。

三年(664)春2月9日、**天皇、大皇弟に命して**、冠位の階名を増し換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。其の冠は廿六階有り。大織・小織・大縫・小縫・大紫・小紫・大錦上・大錦中・大錦下・小錦上・小錦中・小錦下・大山上・大山中・大山下・小山上・小山中・小山下・大乙上・大乙中・大乙下・小乙上・小乙中・小乙下・大建・小建、是を廿六階とす。

五年(666)3月に、**皇太子**、親ら佐伯子麻呂連の家に往きて、其の所患を問ひたまふ。元より従れる功を慨歎きたまふ。

六年(667)春2月27日に、**皇太子**、群臣に謂りて曰はく、「我、皇太后天皇の勅したまへる所を奉りしより、萬民を憂へ恤む故に、石櫛の役を起さしめず。冀ふ所は、永代に以て鏡誠とせよ」とのたまふ。  
3月19日に、都を近江に遷す。  
8月、**皇太子**、倭の京に幸す。

七年(668)の春正月の三日、**皇太子即天皇位**す。  
5月5日に、**天皇**、蒲生野に縦獵したまふ。時に、**大皇弟・諸王・内臣及び群臣**、皆悉に従なり。  
秋7月、時の人曰はく、「**天皇**、天命將及るか」といふ。

八年(669)夏5月の5日に、**天皇**、山科野に縦獵したまふ。**大皇弟・藤原内大臣及び群臣**、皆悉に従につかへまつる。  
秋8月3日に、**天皇**、高安嶺に登りまして、議りて城を修めむとす。仍、民の疲れたるを恤みたまひて、止めて作りたまわず。時の人感でて歎めて曰はく、「寔乃ち仁愛の徳、亦寛ならざらむや」と、云々。  
冬10月の10日に、**天皇**、藤原内大臣の家に幸して、親ら所患を問ひたまふ。而るに憂へ悴けたること極めて甚し。乃ち詔して曰はく、「天道仁を輔くこと、何ぞ乃ち虚説ならむ。善を積みて餘の慶あること、猶是徴无からむや。若し須き所あらば、便ち聞ゆべし」とのたまふ。對へて曰はく、「臣既に不敏し。當に復何

をか言さむ。但し其の葬事は、輕易なるを用いむ。生きては軍國に務無し。死りては何ぞ敢へて重ねて難さむ」と、云々。

15日に、**天皇**、**東宮大皇弟**を藤原内大臣に家に遣して、大織冠と大臣の位を授く。仍りて姓を賜ひて、藤原氏とす。此より以後、藤原内大臣と曰う。

日本世記に曰く、「内大臣、春秋五十にして、私第に薨せぬ。遷して山の南に殯す。天何ぞ淑からずして、愁に耆を遺さざる。嗚呼哀しきかな。碑に曰へらく、春秋五十有六にして薨せぬといへり」といふ。19日に、**天皇**、藤原内大臣の家に幸す。大錦上蘇我赤兄臣に命して、恩詔を奉宣ふ。仍、金の香鑪を賜ふ。

九年(670)2月に、戸籍を造る。時に、**天皇**、蒲生郡の匱辻野に幸して、官地を觀はす。  
夏4月30日、夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も餘ること無し。

十年(671)春正月2日、是の日に、**大友皇子**を以て、**太政大臣**に拜す。蘇我赤兄臣を以て、左大臣とす。  
6日に、**東宮太皇弟**奉宣して、(或本に云はく、大友皇子宣命す。) 冠位・法度の事を施行ひたまふ。  
5月5日に、**天皇**、西の小殿に御す。**皇太子**・群臣、宴に侍り。是に、田儻再び奏る。  
9月、**天皇**、寢疾不豫したまふ。(或本に云はく、8月に、天皇疾病。)  
冬10月8日に、内裏にして、百佛の眼を開けたてまつる。  
是の月に、**天皇**、使を遣して袈裟・金鉢・象牙・沈水香・梅檀香、及び諸の珍財を法興寺の佛に奉らしめたまふ。  
17日に、**天皇**、疾病彌留し。  
12月3日に、**天皇**、近江宮に崩りましぬ。

以上が天智紀の「天皇」、「皇太子」、「大皇弟」が登場する記事である。政権は天皇を中心に、その弟である「大皇弟」と「皇太子」によって運営されている。この三者の運営方式は、671年天皇が亡くなるまで変わることはない。

## 天皇

(1) 三年(664)春2月9日、天皇、大皇弟に命して、冠位の階名を増し換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。

不思議な記事だが、三年(664年)に「天皇、大皇弟に命して」と書かれている。この記述に従えば、664年に天皇が存在したことになる。故に、この記述は日本書紀編者の誤記であると解釈されている。

天皇と表記された理由は、その時は皇太子だったが、後に即位して天皇となったので、ここでは天皇と書いてあるのだという訳である。後に即位したから、その時は「皇太子」だったけれど、「天皇」と書いた。このように解釈されている。よく似た用例が、藤原内大臣にある。鎌足が藤原姓を賜ったのは、亡くなる直前の669年10月15日である。

大織冠と大臣の位を授く。仍りて姓を賜ひて、藤原氏とす。此より以後、藤原内大臣と曰う。

正確に言えば669年10月以降、藤原内大臣と書かれるべきである。しかし、5月5日の記事にはすでに藤原内大臣と書かれている。三年の天皇の表記もこれと同じだ。七年に天皇に即位した皇太子を三年にすでに天皇と書いたのだ。これが通説である。

だが、果たしてこのように解釈していいものであろうか。藤原内大臣の場合は、その人物が特定できる。その名前が明記されているからである。「内臣」と書こうが、「内大臣」と書こうが、「藤原内大臣」と書こうが、全て鎌足であることに変わりはない。その人物は鎌足で一貫している。

だが、「三年春2月9日、天皇」と「七年即位の皇太子」が同一人物であるならば、七年即位以降の記述では、「天皇」「皇太子」が並記されることはあってはならない。「天皇」のみでなければならない。だが、天智紀はそうではない。七年以降も、「天皇」「皇太子」が併記されている。

従って、三年の「天皇」は「天皇」と読む。これが正当な読みである。「三年の天皇は本当は皇太子であるが、

天皇と書いた」と、解釈してはならない。これは日あ本書紀編者の誤記ではない。史実である。三年(664)には、「天皇」「皇太子」が実在したのである。この天皇とは日本國天皇家の天皇である。

(2) 七年(668)5月5日に、天皇、蒲生野に縦獵したまふ。時に、大皇弟・諸王・内臣及び群臣、皆悉に従なり。

668年の朝廷挙げての狩は、天皇が回復したことを祝ってのことであろうか。ところが、その二ヵ月後の秋7月、時の人が、「天皇、天命將及(みいのちをはりなむとす)るか」といった、という風説を載せている。天皇の病状はまだ回復していなかったのであろう。

八年(669)夏5月の5日に、天皇、山科野に縦獵したまふ。大皇弟・藤原内大臣及び群臣、皆悉に従につかへまつる。

この二つの狩りの記事は獵場は異なるが、日時、参加者は同じである。共に5月5日、共に、大皇弟及び藤原内大臣が参加している。天皇－大皇弟という構成は664年と変わっていない。「天皇」がいて「大皇弟」がいる。

(3) 八年(669)10月の10日に、天皇、藤原内大臣の家に幸して、親ら所患を問ひたまふ。

10月15日に、天皇、東宮大皇弟を藤原内大臣に家に遣して、大織冠と大臣の位を授く。仍りて姓を賜ひて、藤原氏とす。

共に天皇と藤原内大臣の記事である。10日は天皇自ら藤原大臣の家に出向き、15日は大皇弟を遣わしている。藤原鎌足は日本國天皇家の重臣である。

藤原鎌足の死亡記事が「日本世紀」という本に書かれている。この本は高句麗からの帰化した僧、道頭によって書かれた。著書名が示すごとくこの本は「日本の世」に関するものである。日本とは関西の日本國天皇家である。

(4) 十年(671)5月5日に、天皇、西の小殿に御す。皇太子・群臣、宴に侍り。是に、田舞再び奏る。

この記事も誤記であると読んではならない。671年の5月5日に天皇、皇太子がいた。これが史実である。この朝廷は日本國天皇家である。日本國には天皇、皇太子が実在していた。

(5) 十年(671)冬10月8日に、内裏にして、百佛の眼を開けたてまつる。

是の月に、天皇、使を遣して袈裟・金鉢・象牙・沈水香・梅檀香、及び諸の珍財を法興寺の佛に奉らしめたまふ。

内裏とは太宰府である。佛の開眼供養をしたのも太宰府である。天皇は太宰府大極殿にいた。そして、奈良の法興寺にも使者を派遣して、袈裟・金鉢・象牙・沈水香・梅檀香、及び諸の珍財を奉納したのである。

(6) 「天皇」、「大皇弟」、「皇太子」という並列記事は、664年から671年まで一貫している。この「天皇」はだれか。探る手がかりは、羽曳野市野中寺(やちゅうじ)に伝わる金銅弥勒菩薩にある。手のひらに乗るかわいいこの弥勒菩薩の台座の框(かまち)には造像記の銘文がある。



#### 丙寅年四月大旧八日癸卯開記

丙寅年四月大旧八日癸卯開(みずのとうひらく)に記す  
栢寺智識之等詣中宮天皇大御身勞坐之時請願之奉弥勒御像也  
栢(かや)寺の智識之等、中宮天皇の大御身(おおみみ)勞(いたず)き坐(ま)しし時に詣り請願し奉る弥勒の御像也  
友等人数一百十八是依六道四生人等此教可相之也  
友等人数一百十八是に依りて六道の四生の人等を此の教に相(みち)びく可き也 (野中寺ガイド)

- (a) 丙寅年(666年)の四月に、中宮天皇が大御身勞坐(病気)になった。
- (b) 栢寺の智識が「平癒を請願」のため、この弥勒菩薩像を奉納した。
- (c) 栢寺とは賀陽(かや)氏が「岡山県総社市」に建立した氏寺である。
- (d) 中宮天皇については日本書紀がその名前を記載していない。

日本書紀はその名前は明記していないが、664年に天皇がいたと記載している。

三年(664)春2月9日、天皇、大皇弟に命じて、冠位の階名を増し換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。

664年に冠位改訂を命じた天皇とは、この「中宮天皇」である。そして、666年中宮天皇は病気となった。故に、岡山総社の栢寺の智識が、平癒を請願して、弥勒菩薩像を奉納した。従って、666年と667年の日本書紀に「天皇」の記事はない。この間、「皇太子」が代行している。

日本書紀天智天皇に記録された「天皇」とは「中宮天皇」と呼ばれていた天皇である。この日本國の天皇が唐との困難な外交を乗り切り、日本の独立を護った天皇であった。「中宮」とは羽曳野市の野中寺の呼び名である。「上宮」「中宮」「下宮」の三つの大寺が大阪南河内に存在した。いずれも日本國の天皇家の縁の寺である。聖徳太子が「上宮法皇」と呼ばれていたことは周知の事実である。

## 大皇弟

「中宮天皇」には天皇を補佐し、重要な仕事を託す弟が居た。日本國朝廷の重要人物である。

- (1) 三年(664)春2月9日、天皇、大皇弟に命じて、冠位の階名を増し換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。其の冠は廿六階有り。大織・小織・大縫・小縫・大紫・小紫・大錦上・大錦中・大錦下・小錦上・小錦中・小錦下・大山上・大山中・大山下・小山上・小山中・小山下・大乙上・大乙中・大乙下・小乙上・小乙中・小乙下・大建・小建、是を廿六階とす。

冠位を12階から26階に改訂したのは「大皇弟」である。「大皇弟」は「ひつぎのみこ」と訓まれているが、表記からすると、天皇の弟という意味であろう。冠位及び冠位授与には「大皇弟」が関わっている。

- (2) 七年(668)5月5日に、天皇、蒲生野に縦獵したまふ。時に、大皇弟・諸王・内臣及び群臣、皆悉に従なり。

八年(669)夏5月の5日に、天皇、山科野に縦獵したまふ。大皇弟・藤原内大臣及び群臣、皆悉に従につかへまつる。

「天皇」と「大皇弟」の関係は変化していない。

- (3) 十年(671)春正月6日に、東宮大皇弟奉宣して、(或本に云はく、大友皇子宣命す)冠位・法度の事を施行ひたまふ。

この時は、「東宮大皇弟」という呼称に変化しているが、664年の「大皇弟」と同一人物であろう。不思議なことだが、これほどの要職にありながら、この大皇弟の名前は一貫して書かれていない。むしろ、その名前は知られていたであろう。「大皇弟」とは誰であろうか。

- (4) 天武紀に「皇大弟」「大皇弟」が登場する。

是の時に、近江朝、大皇弟東國に入りたまふことを聞きて、其の群臣悉く愕じて、京の内震動く。

天武紀のこの「大皇弟」とは天武である。「京」とは太宰府である。「東國」とは太宰府の東の國、行橋市をさす。「近江朝」とは太宰府にいた日本國天皇家の朝廷である。その中心は、大友太政大臣である。

## 皇太子

- (1) 五年(666)3月に、皇太子、親ら佐伯子麻呂連の家に往きて、其の所患を問ひたまふ。元より従れる功を慨歎きたまふ。

六年(667)春2月27日に、皇太子、群臣に謂りて曰はく、「我、皇太后天皇の勅したまへる所を奉りしより、萬民を憂へ恤む故に、石擲の役を起さしめず。冀ふ所は、永代に以て鏡誠とせよ」とのたまふ。

五年、六年には「皇太子」が登場する。「皇太子」は664年に登場する天皇の「皇太子」である。羽曳野市野中寺に伝わる金銅弥勒菩薩の造像記の銘文では、666年「中宮天皇」は重病であった。六年の春に「皇太子」が述べた言葉は「中宮天皇」の言葉である。この時期、「中宮天皇」が病気のため、「皇太子」が天皇を代行したと思える。

## (2) 七年(668)の春正月の三日、皇太子即天皇位す。

七年の正月に、「皇太子」が天皇に即位している。確かに、666年、「中宮天皇」は重病であった。しかし、「中宮天皇」が亡くなったという記事はない。つまり、七年春正月もこの天皇が在位しているということになる。この即位記事は不可解である。

## (3) 十年(671)5月5日に、天皇、西の小殿に御す。皇太子・群臣、宴に侍り。是に、田儻再び奏る。

十年5月5日には、「天皇」が西の小殿で宴を開催した。そこには、「皇太子」が参列している。通常、この「皇太子」は「大皇弟」の誤記であると読まれている。だが、そのように読むべきではない。「皇太子」はそのままに「皇太子」と読む。「皇太子」は「中宮天皇」が重病になった五年と六年に天皇を代行した皇太子である。

七年(668)に「皇太子」が即位したのであれば、十年の記事に「皇太子」が登場するのは不可解である。七年以降に、新たな「皇太子」が立位したという記事はない。

## (4) 十年(671)春正月2日、是の日に、大友皇子を以て、太政大臣に拜す。蘇我赤兄臣を以て、左大臣とす。

天智紀では「皇太子」の名前も一貫して書かれていない。不思議なことである。「皇太子」は「天皇」、「大皇弟」に次いで、政権では要職にあったと思われる。日本國天皇家朝廷で重要な職務とは太政大臣である。その太政大臣に「大友皇子」が就任した。「大友皇子」と書かれているが日本國天皇家での名前は「大友王」である。「大友王」は十年の12月、「天皇」が亡くなる前に、五人の重臣を集めて「天皇」の前に誓っている。「皇太子」とは「大友王」であろう。

# 天武との会見

十年(671)10月17日、病床の日本國天皇は「東宮(天武)」を呼んだ。その会見場所は太宰府大極殿である。

勅して東宮を喚して、臥内に引入れて、詔して曰はく、「朕、疾甚し。後事を以て汝に屬く」と、云々。是に、再拜みてたてまつりて疾を稱して固辭びまうして、受けずして曰したまはく、「請ふ、洪業を奉げて、大后に付属けまつらむ。大友王をして、諸政を奉宣はしめむ。臣は請願ふ、天皇の奉爲に、出家して修道せむ」とまうしたまふ。天皇許す。東宮起ちて再拜す。便ち内裏の佛殿の南に向でまして、胡床に踞坐げて、鬢髪を剃除りたまひて、沙門となりたまふ。是に、天皇、次田生磐を遣して、袈裟を送らしめたまふ。壬午(19日)に、東宮、天皇に見えて、吉野にまかりて、修行佛道せむと請したまふ。天皇許す。東宮即ち吉野に入りたまふ。大臣等侍へ送る。菟道に至りて還る。

- (1) 内裏とは太宰府大極殿内裏である。日本國天皇と東宮との会見は太宰府で行われた。
- (2) 東宮とは天武である。
- (3) 天武のこの時の名は大海人皇子である。天武は九州天皇家の王であった。

# 日本國天皇の崩御

十年(671)12月3日、天皇、近江宮に崩りましぬ。

日本國の天皇が亡くなった。白村江で敗れた百濟は滅びた。戦勝國である唐は日本國に兵を送り、使者を派遣してきた。使者は表函を持ってきた。その中には何が書いてあったのか。日本國朝廷はその書簡が唐の皇帝高宗のものかどうか、何度も尋ねている。

詔書には皇帝印がなかったのであろう。唐皇帝の詔書であれば日本國はその要求に答えなければならない。拒否すれば、唐は日本國に大量の軍を送ってくるであろう。國の存亡をかけた最後の戦いが始まる。だが使者は皇帝の使者ではなく、百済にいた百済鎮將劉仁願の使者であったと伝える。日本書紀は表函がもたらされたことは記したが、その中味は書かなかった。知らなかったからである。

唐軍の戦後処理はまず都督府の設置である。百済の場合は五つ、高句麗の場合は九つ置かれた。

平壤にはさらに安東都護府を置いた。唐の敗戦処理の政策は、唐を宗主国とする册封体制に組み込んで従属国にするというものである。  
(「法隆寺のものさし」ミネルヴァ書房)

唐の日本占領政策は成功しなかった。しかし、別の形で日本國天皇家は滅びた。

672年3月18日、内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣して、天皇の喪を郭務悰に告げしむ。是に、郭務悰等、咸(ことごと)に喪服を着て、三遍挙哀る。東に向ひて稽首(おが)む。

21日、郭務悰等、再拜みて、書函と信物とを進(たてまつ)る。

672年5月30日、郭務悰等、罷り帰りぬ。

この記事は天武紀にある。3月18日、筑紫にいた郭務悰に天皇(日本國天皇)の死を知らせたのは、近江朝(日本國天皇家)ではない。知らせたのは、天武である。郭務悰が拝んだのは東の方向だった。東方に近江朝(日本國天皇家)の首都が存在した。そして、21日に郭務悰等が再拜みて、書函と信物とを進った相手は近江朝ではない。天武である。

## 朝散大夫郭務悰

日本國天皇ガ亡クナツタ。日本國ノ都、近江ハココ筑紫カラ遠イ。ソコマデ進入スルノハ危険過ギル。背後ヲ絶タレルトテモ持ツマイ。スグサマ侵略スルコトハカナウマイ。ココハ外交ダ。マダマダ日本國ノカハ侮レナイ。焦ッテハナルマイ。慎重ニ行動シ、日本國天皇家ノデカタヲミナケレバナラナイ。

日本國ノ若キ王大友ハ、我ガ唐ノ軍勢二千人ガ到着シタ11月ニ、重臣五人ヲ集メ誓盟シ「六人心ヲ同ジクシテ、天皇ノ詔ヲ奉(ウケタマハ)ル」ト誓ッテ聞ク。

コノ誓盟ハ、日本國天皇ノ路線継承ノ誓イデアロウ。大友王ガ日本國ノ皇位ヲ継承シタシテモ日本國ノ”反唐・非属化路線”ハ変ワルマイ。

次ノ一手ガ難シイ。……………再戦モアルカ。ダガ、今我唐軍ノ派兵ハは難シイ。朝鮮半島情勢ガソレヲ許サナイ。新羅ガ独立ノ道ヲ歩モウトシテイル。

……………イヤ待テヨ。ヨク考エロ、キツ手ハアル。難局打開ノキーヲ握ル人物ガ一人イル。

百済の鎮將劉仁願は使者を変えて何度も日本國天皇に親書を渡している。しかし、交渉は暗礁に乗り上げたまま、前途が見えない。二千人もの軍隊を送り込んだが、最終には再戦も覚悟しなければならないか。この決着を見ないまま日本國天皇が亡くなった。日本國敗戦という歴史上初めての国難処理を引き受けた日本國天皇が亡くなった。

唐は日本國天皇の死に対して迅速に行動した。九州天皇家の天武にすぐさま書簡を送った。天武の返礼は甲冑弓矢の贈与であった。この贈り物は戦いを意味する。すでに天武の心の中には蜂起があったように思える。贈り物はこれだけではない。総合すると、繩一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤というものであった。ここに、郭務悰と天武の間に同盟が結ばれたと考えるべきであろう。天武との同盟を見て5月30日郭務悰は帰国した。

## 天武天皇

歳冬12月、日本國天皇の訃報を聞いた九州天皇家・天武は灰色の雪空を見上げて何を思ったであろうか。

日本國天皇ガトウトウクナツタ。唐トノ交渉ノ心労ガ原因デアロウ。

太宰府ニイル大友政権ハキツ今不安ト緊張ノ最中ニアル。……………唐ハ此ノ機ヲ逃サズ、日本ニ強ク求メテクルデアロウ。コレヲ危惧シテ大友王ハ重臣五人ヲ集メテ、内裏ノ西殿ノ織ノ仏像ノ前デ誓ッテ、ト聞ク。シカシ、日本國ハ白村江ノ敗戦デ兵ノ主力ヲ失ッテイル。息子ヲ失イ、夫ヲ失イ、兄ヲ失ッテ人々ハ悲シミニクレ、唐ノ侵攻ト戦ウカハ残ッテハイマイ。

イカニ大友王ガ優秀トイエドモ、コノ事態ノ收拾ハ困難デアロウ。ココデ我王朝ハドウ動クベキカ。

九州天皇家天武は決意する。

コノ機会ハ我ガ王朝ニトッテ二度ト無イチャンスカモシレス。今日マデ日本國ノ風下ニ甘ンジテキタ。国家主権ハ常ニ日本國ガ握ッテイタ。ダガ、事態ハ変ワッタ。白村江デ大敗シタ日本國ニハモハヤ嘗テノチカラハナイ。神武ヲ始祖トスル我ガ王朝ガ、今コノ立チ上ガル時ダ。

672年6月22日 天武、蜂起を宣言して東國(行橋市)に入る。壬申・天武の乱。

7月23日 日本國天皇家、太政大臣大友王、九州の山前に自ら縊れぬ。

## 日本國天皇家と日本書紀

日本國天皇家		日本書紀	
	<p><b>乎娑陀天皇</b></p>	572	<b>敏達天皇即位</b>
		585	<b>用命天皇即位</b>
		588	<b>崇峻天皇即位</b>
<b>法興</b>	<p>591 <b>上宮聖王即位(等由羅宮)</b> 元号法興・冠位12階制定 596 法興寺の仏堂・歩廊完成 600 第一回遣隋使(隋・文帝)</p> <p>607 第二回遣隋使(隋・煬帝) 608 隋答礼使裴清来日</p> <p>618 蘇我馬子没 618 唐建国(大業8年・李淵・元号武徳)・ 619 第一回遣唐使(小野妹子)</p>	593	<b>推古天皇即位</b>
	<p>622 <b>上宮聖王没</b> 622 <b>山代王即位(阿須迦宮)</b></p> <p>630 第二回遣唐使(太宗・李世民)</p> <p>641 船氏王後没(墓誌「阿須迦天皇の代の末」)</p> <p>643 <b>山代王没(蘇我氏に殺害さる)</b></p>	621	<b>聖徳太子没</b>
		629	<b>舒明天皇即位</b>
		642	<b>皇極天皇即位</b>

<b>大化</b>  <b>白雉</b>	645 <b>袁智天皇即位(難波の宮)</b> 大化の改新 648 大野及び椽・築城 650 元号白雉・藤原京造営開始 652 藤原京・大極殿完成 653 第三回遣唐使(吉士長丹、高田根麻呂) 654 新羅武烈王即位
	655 <b>皇太后天皇即位</b>  659 第四回遣唐使(坂合部石布、津守吉祥)
	662 <b>中宮天皇即位</b> 662 白村江敗戦(唐高宗李治) 664 大皇弟冠位26階制定 664 唐使、朝散大夫・郭務悰来日 665 唐使、朝散大夫・劉徳高来日 666 中宮天皇大病(野中寺・弥勒菩薩台座陰刻) 667 近江に遷都 唐使・法聡来日、日本國の送使・伊吉博徳 668 高句麗平壤陥落 669 藤原鎌足没 670 斑鳩寺(法隆寺)火災 671 大友王太政大臣 671 <b>中宮天皇没</b> 672 天武の乱、太政大臣大友王敗死

	645 <b>孝徳天皇即位</b> (難波長柄豊崎宮)
	655 <b>齊明天皇即位</b> (後飛鳥岡本宮)  661 <b>齊明没</b> <div style="background-color: yellow; text-align: center; padding: 10px;"><b>空位</b></div>
	668 <b>天智天皇即位</b>  671 <b>天智没</b> 672 壬申・天武の乱
<b>朱鳥</b>	673 <b>天武天皇即位</b> (飛鳥浄御原宮) 673 即位祝賀新羅使節 677 新羅朝鮮半島統一
	688 草壁皇子没 689 <b>持統天皇即位</b>
<b>大宝</b>	697 <b>文武天皇即位</b> 701 大宝元年 702 第一回遣唐使 (唐則天武曩帝)
	707 <b>元明天皇即位</b> 710 平城京遷都 717 第二回遣唐使 (唐玄宗皇帝)